

日も雨で、宿について記している。京詣での人で込み合
い、六条の宿には百七十人も宿泊している。四畳半に
二畳の押入れのついた二階の部屋に、何と七人も泊って
いるというのだが、男女入交りなのだろうか、信じられ
ない狭さで女性はやさしく不自由だったであろう。雨の
中を帰途につく。

二十八日、二十九日、四月朔日と四日ばかりで帰宅し
た。翌日は、中年の直持が旅路の疲れで寝ていたという
のだから、定足の母の疲れはどうであつたか、少女は案
外元気なのかも知れぬなどと想像するか、一切書かれて
いない。あるいは二十四日に「六条にかへりぬ」とある
ところで、供連れで一足先に帰ったとも考えられる。

四月九日には竹ヶ鼻の御坊に詣でて、そこで姪の小春に
遇つた。法蔵寺の妻であるその姪に、しきりに寄ってい
くよう勧められ、大いにもてなされて帰った。

『小塚直持日記』のうち、女性に関する記事は以上で終
わっている。家族親戚では母・妻・娘・妻の妹・姪につい
て、交友関係では山内定足の母、さる律師が子を生ませた
女・自分が名古屋から連れて来た女、無関係な人では盗人
を助けた男の妻などに言及している。このうち叙述によつ
て人柄や状況がわかるのは、夜中に神経的な病氣になつた
自らの母、息子とけんかする定足の母、そして律師の愛人

となり子を生んだ女・盗人を助けた女の妻といった人たち
で、事柄が特殊であるだけに直持も心を動かされ、それぞ
れに感想を書き記している。妻や娘には感想を何も記さな
いのは、日々事なく過しているからだろうか。
上層農民である直持は、たまに農作業について記すほか
は、ほとんど毎日男の大人子供に書や漢文、日本の古典を
教え、友人たちと歌会を開き、茶道をたしなみ、笛（笙・
箏）を楽しみなど風雅の世界に遊んでいる。しかしこう
した集まりには女性の影が見えない。おなじころ、名古屋
では、千村甲斐子が夫の上田仲敏や友人たちと歌会に参加
し、才媛と謳われている。直持の暮らす村が、それだけま
だ開けていない田舎だったということだろう。

千四九四一〇〇四

愛知県尾西市北今字西田面二ノ切四〇一四

TEL・FAX 〇五八六・六二一六六〇五

武元はな「西国巡礼道の記」

(翻刻) 倉敷古文書の会 佐々木洋子

女琴所

天明三年卯の春西国巡礼に思ひ立杖を携へ笠を傾けてやう
く敷居坂をこしぬれば

一坂を越すや古巣の雀の子

とうち笑ひ雨たれの川を渡る

渡るも安き春の川波

などおとけてついにはるくの旅路に赴きぬ そのめくる
所名所旧跡にあふては風景を眺め古を思ふて感賞のふかき
まゝおろかなる筆をとりて発句を書きつけ侍る されとも
筆拙ければあらゆる名所旧跡くわしく記すことあたはず
たゝあらましを書き留め様々西国道の記と題して経めくる
しるしとなすのみ

廿七番書写山 *はるくとのほれば書写の山おろし松の

ひゞきも御法なるらん

書き写す山やむかしの花曇り

広嶺天皇 おのつから心も広し花の嶺

増位山神原式部卿の菩提所 霞むるや位をます山の花柳

廿六番法華山一乗寺 *春は花夏は橘秋は菊いつもたへせ

ぬ法の華山

ねかふかな御法の花の一乗寺

廿五番清水寺 *あわれみや普き門にしなくのなにをか

なみのこゝに清水

蓮の根を供物に楚々け清水寺

丹波の福城より舟にて下る 時ならぬしくれてあまりの
寒さに

春もまた時雨や北の山おろし

かわもりへとり外宮内宮に参拝し奉る

奉る幣やこゝろの玉椿

成相寺二十八番 *波のおと松の響も成相に風吹わたる天
のはしたて

橋立や春は霞に成相寺

此御山より見れば天の橋立 よさの入江一目に見ゆる 誠
に錫杖をふせたることくしやく杖嶋ともいふ 橋立明神
切戸の文殊に参詣して

乗りこんてよさの入江や花の波

錫杖やわたす文殊のしてこふし

由良のみなと三庄太夫か首引の松

首ひきといへは氣疎し松の藤

松の尾寺二十九番 *そのかみはいく世経ぬらん便をはち
とせをこゝにまつ尾の寺

そのかみのちかひ朽ぬや松のはな
三月二日丹波の国をはなれ若狭の国に入りて

きのふ丹後けふのわかさや桃柳

小浜八百比丘尼の堂あり その古はたのとうまん公のそく
女とかや 龍宮より二また三またの竹と人魚とをえて帰ら
れしそく女その魚を喰ひ給ふによつて十八才のすかたにて
八百年なからへ給ふとかや

八百とせの尼や姿の菊津花

狂歌

八百とせも六十しもおなしいにしへに大師も尼もすか

たはかりそ

竹生嶋三十番 *月も日も波間に浮ふ竹生島船に宝をつむ
心せよ

長命寺三十一番 *八千年や柳に長き命寺はこふあゆみの
かさし成らん

初種も長ふ蒔おけ命寺

此所念仏池とて南無阿弥陀を唱ふれば 清くすみたる池水
もぶつくゝと湧きあかる事妙也

狂歌

たつね来て今そ唱ふるなむあみたふつと答ふる池の玉

水

観音正寺三十二番 *あらとふと導きたまへくわん音寺遠

駿河の国岡崎の城下浄瑠璃御前の石塔あり 御菩提所式百

八間の大橋矢はきの橋といふ

岡崎や橋のわたりのくれ兼る

なかき日をまつやおか崎のとめ女郎

煙巖山鳳来寺靈験の薬師如来

薬草のもゆる煙かいわふやま

右は相生山といへり 大木の桐有 枯れし中より顯れ給ふ

仏像也 それより遠州秋葉へ三月十八日に参詣す 此御山

いにしへ平家のたてこもりし所とかや かゝる源氏の御代

にあひて日々に増繁榮也

白はたもなひく霞や杉木たち

秋の葉の梢はいつれやよひ山

下向道・しふ川・別所・山の吉田・おはた・かも・寿王・

御油・赤坂・ほうぞうし・山中・藤川・岡崎・ちりふ・熱

田・宮より舟にて伊勢の桑名に渡る 右のかたは名護屋に

ちかし

乗出し尾張名残や新桑名

桑名へ着て

ふみわけて入るやい勢ちの八重霞

大神宮へ参詣して恐れながら

幣やこれ残るさくらの朝あらし

神風やしめしか原にもゆる草

き国よりはこふあゆみを

みちひけや法のいとゆふ観音寺

多賀の御社に参りて

手にさはる柳を幣や御宝前

小野の駅に小町の墳有

今もかくおのゝ千草の芽立哉

栢原伊吹艾をうる所也

めされよや伊吹もくさも此芽立

近江と美濃の境寝物語にて

美濃淡海寝物語りや忘れ霜

山中の駅常盤御前の塋あり

花やみとりときはの塚の松幾代

青墓の宿此処てゐるの姫の汲給ふ清水池有 少し入込ミゑ

んくわん寺とて義朝・とも長・義平の塔有

むかし源氏尋て春の名残かな

谷汲山三十三番 *万代のねかひはこゝに納めおく水は昔

より出る谷川

*世をてらす仏のしるし有ければまた燈もきへぬなりけり

*今までは親と頼みし笈摺をぬぎやおさめるみのゝ谷汲

谷汲やくんて菩提の種をまく

尾張の国名古屋の城下を見物して

目さましき大根の花や国の花

朝熊か嶽に登る日雨降ければ

あさくまやまふかにつゝむ春の雨

勢紀の境なる梅か溪を過るとき

実をむすぶ産屋かいつれ梅ヶ谷

此処より熊野路をしはらく行きては八鬼山を越

一八や鬼もあさむく九十九折

卯月朔日曾根太郎次郎とて大峠をこへて

曾根太郎次郎やつゝ風車

清水寺田村丸御建立の観音秘仏海辺八鬼か古城跡有 鬼神

退治し給ふ由来をあらゝ聞き侍りて

杖ふせてむかしをきくや鬼助

その日親しらす子しらすといふ所を通りて

着更るやしらぬ親子の初拾

折ふし讃州の道者七人を道つれしてなを行くゝ同道せは

やと契りて

俱に聞かんおなし法路の杜鵑涼しき中の隔てなきかね

月浪

月浪

仏の道は貴賤わかたすたかひにへつらひなければ

かざるつき姿はあらし夏の虫

月浪

熊野新宮へ詣て

わけ入るや熊野庄司か青すたれ

それより奥の院神のくらへ参りて

早苗かなやかて菩薩のかみのくら
浜の宮明神三社ふたらく寺といふ

那智山青岸渡寺第一番 *補陀洛や岸うつ浪は三熊野か那
智の御山にひくたきつせ

三国一の滝を拝て

藻の花や青き岸にも咲きわたる

雲井から那智の清水やさらし布

もろこしになき雪降りや夏の滝

月浪

熊野本宮

卯の花や王垣しらむ本の宮

湯の峯小栗本復の温泉なり

ゆのみねや旅のゆかたの青あらし

逢坂峠をこへて

幾峠またあふ坂や閑古鳥

十丈峠 十丈や樹の下やみをいく曲

日高川喜代姫の事を思ひ出て

この川の今も懶き藻舟かな

道成寺卯月八日もふてゝ

道成りし寺や八日の花の庭

行当たる日を幸や仏生会

藤しろ峠金岡の筆松あり

筆捨のまつを名乗やほとゝきす

狂歌

紀伊を出やまと河内にわかれても御縁のあらは又もあ

ふみ路

藤井寺五番 *参るより頼みをかくる藤井寺花の台もむら

さきの雲

当麻寺中母姫の霊地なり 蓮の糸を五色に染めて曼陀羅を

織給ふ染井有 卯月十四日練供養の折から境内みな御開扉

也 一々拝見して

曼陀羅のいと殊勝也蓮の莖

津本坂山六番 *岩をたて水をたゝへて坪坂の庭の砂も浄

土なるらん

此奥院一岩に五百八鉢の羅漢有 中央に釈迦如来ましく

又一岩に二十五菩薩其外金剛界・たいそう界の大日如来あ

また仏ばさつ都合千鉢といふ 有難き御事也

壺坂や嶺は仏の涼み石

此歸りに右の同行と又出会ひぬれは立なから

いとつよき緑か蓮の其浮葉

仏頭山橘寺 聖徳太子の御誕生所なるよし

御影猶代々橘の花の香そ

岡寺七番 *今朝見れば露おか寺の庭の苔さながら瑠璃の
光なりけり

長谷寺 *いく度も参る心は初瀬寺山もちかひもふかき谷川

紀三井寺二番 *古郷をはるくこゝにきみる寺はなの都
もちかく成らん

倭歌の浦へちかし

鐘すゝし此三井寺も浦隣る

妹背山へ船にて行

世もかゝるいもせの山の茂りかな

和歌の浦王津島大明神・東昭宮倭歌の天神いつれも巡拝す

和歌の海かほる嵐や片すたれ

若祭は十七日成を四五はやければ残りおゝくして

聞きてゆく後の名残やわか祭

若山を通り栗嶋明神を拝す

立寄てかたみの浦やさす櫛

粉川寺三番 *父母の恵みも深きこかわ寺仏のちかひたの

もし哉

笈かけ板 ゆあさ板とて有

笈掛の板実のりの旅よ笠

楨尾寺四番 *深山路や楨原松原分け行はまきのおてらに

駒そいさむる

開龜のとき

開帳の庭や卯木の雪と花

此所にて彼道者に別れ先方は近江の長命寺へうち戻り何れ
はこの時出会ふ事もあらんやとて

南園堂九番 *春の日はなんえん堂にかゝやきて三かさの
山に晴るゝ薄雲

いにしへをかほる本草や奈良の風

宇治の里茶つみの折なれは

旅も又日々に新や茶の初香

次に平等院の庭扇の芝に立寄りて

手をさへてあふきの芝や夏のかせ

三室戸寺十番 *夜もすから月もみむると明行は宇治の川

瀬に立つはしら波

醍醐寺十一番 *逆縁も洩らさてすくふ願なればしゆんて

い堂もたのもしき哉

岩間寺十二番 *水上は何国ならん岩間寺 峯うつ波か松

風のおと

又同行に出逢ふて一所に札を納めて

諸共に聞くや岩間の蟬の経

石山寺十三番 *後の世を願ふ心は軽くとも仏のちかひ重

き石山

すゝしさも来て石山の月やこの

此所にて東西に別離をかなしみ柳を折て

眼のとゝく程は跡見む夏柳

三井寺十四番 *出入や波間の月は三井寺の鐘のひゝきに
あくる水うみ

あくる水うみ

暑き日の晩鐘うれし園城寺

今熊野十五番 *むかしよりたつともしらぬ今熊野仏の誓
たのもしきかな

かさゝきや螢はかりは今熊野

六波羅堂十七番 *おもへとも五つのつみはよもあらし六
波羅堂へ参る身なれば

清水寺十六番 *松風やおとわの滝は清水をむすぶ心は涼
しかるらん

六角堂十八番 *わか思ふ心の内はむつのかとたゝ丸かれ
と祈るなりけり

かうとう十九番 *花を見て今は望のかうとう寺庭の千草
もさかりなるらん

北野天満宮へ詣てゝ

順ふて礼にきたかやほとゝぎす

愛宕山に参り下向群集なれば

諸人の櫛とる手や杖と笠

あなう寺廿番 *かゝる世に生れあふ身のあなうやと思は
て頼め十声一声

善峯寺廿番 *野をも過山路にむかふ雨のそらよしみねよ
りも晴るゝ夕たち

岩清水八幡宮に参る

代々尽す流れて涼し岩清水

武元はな「出雲道の記 ひとり笑ひ」

(翻刻) 倉敷古文書の会 柴田ミツル

うくひすの声あかりせは花さかぬ山里いかで春をしらまし
と 実にもかゝる山里に住わひて花さく春もしらぬ賤の女
の いとくりことのいとまなきにまして和歌のうら道とふ
へき人もなく連歌俳諧もさへ短ふして及なけれと 過にし
三十しあまりの頃三十三所にあゆみをはこふ折から旅のう
さにここの御寺かしこの名所にて あやなき言草をかい付
しを西国道の記となん名付はべりぬ 又其後八雲立つ出雲
より敵島にまふてしみちくさを其まゝにうちすてんも本意
なければ出雲道の記ともいわんか されどあへて見る人に
見せんとにはあらず おもへばたゞこの世の旅も先ちかく
冥途の門出も をちこちはかられねは 拙き筆にかれこれ
難波のあしの言葉かあるあつて ふりゆく老のひとり笑ひ
となすのみ

狂歌

無二無三みそひともしをならへてはわれと笑ふてひと
り楽しむ

出雲の国大社へ詣んと友たちをいさなひ弥生末の三日に出
たちて杖と笠を持ちながら

そうち寺廿二番 *おしなへて高き賤しき総持寺の仏の誓
たのまぬはなし

勝尾寺廿三番 *重くともつみに祈りは勝尾寺仏を頼む身
こそやすけれ

鷹尾山多田院満仲公の御墓所 七十六才の御時恵心僧都を
戒師として御出家なされ御名を満慶と号し奉る 後また覺

信とあらため給ひ 弥仏道の御志深くして八十六歳にて御
逝去なされ本地は不動明王多田権現と崇め奉る 甲冑騎馬

の御姿御開帳の折からなれはくわしく拝し奉る 宝物並に
頼光・頼信・頼義・義家公の宮有り

散て後も名のみ多田しき牡丹哉

次に渡辺の宮すこし行て満願寺本尊目あきの弥陀此処美丈
丸・幸寿丸・仲光の石塔其外土中の石塔数多有 次に鼓か

滝とて有

音をそへて鼓か滝やかんこ鳥

中山寺廿四番 *野をも過さとをも過て中山の寺へ参るも

後の世のため

当寺にて三十三所廻り納めて

納めおく種を千手の早苗哉

帰るさの悦ひに

国ちかきほと卯の花の道あかり清水むすんで拝む土神

嬉しさは無事とふ門の賑かに

(*は御詠歌)

首途や旅のいとまの弥生空

作州津山にて古き友に尋あひて

語るほとおもへは花のむかし哉

杖をとりて立ながら別れをおしみて

笠のひもむすへは霞む別かな

二の宮へもふてゝ

降本やこの手かしは手神の庭

久米の皿山をなかもやりて

さら山にもるや弥生のでこぶし

院の庄備後三郎旧跡の桜を見て

世をこめて名のみ桜の若葉哉

木山に詣て御宝前を拝して

千早ふる神のまがきや花の鈴

高田玉雲山玉藻明神に詣て殺生石を見れば沈丁花生しけり

て

世にかほる石の名高し沈丁花

ひかります玉のお寺や花の雲

真賀湯原は湯所也 鳥井かたわに芭蕉百回忌の塚あり

百よろつ代々に玉巻はせを哉

伯州大山にのほれば大ぬに雪つもりてあり 加藍をめぐり

拝して

大空や山より雪のおそ桜

米子へ下城下より舟にて安木へ渡る 卯月朔日に雲の国へ入

雨の日やみのさへ旅の衣かへ

宍道の海の北を行はかゝのくけといちはた薬師へ参 松江の城下を右に見て左へ入いさなきの御宮あり 又大葉村にいさなみの御宮あり 此所へ国造様御代つきの御時御幸有となん又行は佐原村^{ママ}そさの尊の御宮八重垣の古跡稲田姫の御宮又鐘池有

たうとしな出雲八重垣かほる風

鐘の池見れば神代の清水哉

平田より右の方浮浪山鰯淵寺は霊地にして弁慶^{ママ}花血を洗ひし淵有滝有 雪みそれかとうたかふさわし権現の御社あり

拝む手に夏のみそれや浮浪山

杵築の大社御宝前に詣ふて

はるく^{ママ}と出るや雲ゐのほとゝきす

袖たれて拝む此手やはつ扇

ふし拝む神の御庭や富貴草

八足御門にのほりて拝すれば御宮殊に広大に見ゆ 御祈禱所を拝見すれば金屏風など数々の中に農業の始終を圖したり

民草のしける姿や金屏風

地内に天神宮あり

天満る庭に硯の清水かな

日の御崎へもうて宮居 物さひていと殊勝なる事いふも更なり 歌といふものはよみたる事なけれと

ちはやふる神の玉垣物さひていく世ふれにし八重の塩風

□□大明神へ詣て

卯の花の雪や御庭の神明り

西村氏はわか国へも配札に來り給ふゑにしあればわれしり杖をとりて留め給ふ

歌舞いと竹のもてなしにて興せられ珍らかに覚えて

いと竹や旅を忘るゝ舞扇

留別

別れうやすゝしき森の陰をけふ

夫より岩見へうつる大森より銀山は一里あり 大明神をふし拝み次^{ママ}にからん寺とて岩山あり 戸口わつかにみへて内に入れば御堂のことく広大なる五百羅漢あり 卯月八日に詣て

岩見れば五百羅漢や仏生会

此国次々にてあふ人みな御苦労くと言葉をかけさるはなし 同寺にて円福寺の和尚宿の事ともいねもころに仰けられは嬉しさに

言の葉や旅は情を恵美寿かな

山路にかゝり時鳥を聞て

聞や此の笠かたふけて時鳥

中山の茶屋に寄れば発句なと張りまはして有

卯の花や寄れば香もありお茶もあり

可辺より川舟にて広島へ下り海船にて宮島へ渡り厳島明神へ詣て

羽扇や□津の中の厳島

弥仙に登れば清らかなる水の岩間をめぐり岩打滝をなかめて

涼しさや岩根をまとふ滝の糸

腰折

みねよりも落くる滝のいときよく岩間くを結ふすゝ

しさ

山めぐりありねきに本堂ありて内にありかたき神仏を拝し奉り 宿にて舟を借て周防岩国に舟子をともない往て日本一と聞きし算盤橋を渡り橋根よりうらおもてを見 錦帯橋ともいふ五橋あらひてあり

涼しさやまれに五つの橋のうへ

こし折

いわくにのにしきおふてふはしのうへふみみし後の思ひ出にせん

宮島に帰り朝舟に乗つて備後尾の道へと出船せしに おんとのせ戸を越えて東風にさえられ舟を泊し さひしさやらんかたなく となり船のなつかしさに

橋かけて涼みかよはんとなりふねおい手をねかふ夏山

のかけ 勢州人

尾の道に舟着て鞆のみなとをとへは古名を玉の浦といふと聞て

狂歌

こととへは道のあないもうらやかにさすか名にあふ玉のうら人

鞆の祇園社へ詣て

かしは手もともにまじるやほとゝきす

小松寺へ詣て重盛卿の植給へる松生いしけりてあり 御石塔有

しけりたる小松のむかしかほる風

福山の城下を過 備中笠岡をこへて吉浜よりよこ島へより ころの島へわたり八十八ヶ所をめぐる

八十八つの浦のすゝみや石仏

庭瀬より宮内吉備津宮へ詣て

神在すや山も尊き春にきて

夫より備前一の宮へ詣て

塩たれてゆはたなくちやちりあふき

長尾先生は遊学のために遠国より諸国をめくり給ひ たま
く賤の家を訪はれ童へともて御教誨下されしに おもは
すも病の床にふし給ひて医りやうしるしなくて終 あかつ
きの雲にかくれ給ふ 誠にはかなき世のため知るもしらぬ
もおしまぬはなかりき かなしみのあまりに

したふほと散際はやしけしの花
三十五日御霊前を祭るとて

其徳の厚き終りのめてたき彼は
思ひつゝけて夕

名のみ世にちりてもちらし富貴草
七、日を祭りて

忘れぬあつき涙やこの日数
葉月の六日百ヶ日をとふらひて御つかにまふて、

名木もちるか百日の袖の露
巳の四月二十六日一周忌を祭りて

手向けるやこの日なみたのかきつばた
午四月三回忌をまつりて

さりし花の面かけみゆる若葉哉
戌の四月二十六日七回忌を祭りて

七とせをまつる蓮のうき葉かな
陸奥の志村先生稀に茅屋を尋ね給ひて童子の御教訓をよろ
こひて

尊くも称して鉢の君子哉
ほとなく京都へ登り給へは

末つむを待つもちかしや綿の花
ことし因州岩井に湯あみせんと弥生の中のけふ出立て

恩愛の重きそ家に九輪草
旅もうしはし別れや母子草

作州十丁は我古郷なればふかきちなみを友として
諸ともに旅のちかしや呼子鳥

滝の宮戸明明神へ詣ふて、
拝む手に風のそくや花の滝

原の里に至れば温泉の友五人と成
玉鉾の道や五形の花の友

長尾といふ所に二夜とまりぬ 泉屋のあるしは風雅に遊び
て言の葉の道も深れは

かさの紐とくやあんすの花の宿山の奥まで恵む春雨
泉屋

眠む気つく折から得たり花の友鳶も巢を出てしたふ森
かけ 同

用ヶ瀬にぞて舟にて取鳥へ下る
いな葉川桜うくひや瀬を早み

浜坂の観音へ上り二里斗細き砂場を行
雪のはた浜の真砂や春霞

岩井にぞて薬師の尊前に

拝む手に花の雪吹やるりの庭

播磨なる風土雨中の眠りさましとて道の記発句など見せ給
へは

つれくりに飛こむ蝶や春の雨
宿駒屋あるしを今度とひて

床しさや軒端に匂ふ花の宿霞の中にひらくむしろ戸
駒屋

卯月朔日

事たりぬ旅の湯衣をころも更
ぬき捨てた病苦も軽し初給

鳥取の御家中平田何かしにまねかれ岩井川のほとりにてい
ろく珍味を給はりければ

なれ易き旅の契や一夜ずゝ

佐々木 洋子

〒七一〇—〇八〇三

岡山県倉敷市中島五一二

TEL 〇八六—四六五—七五六九

柴田 ミツル

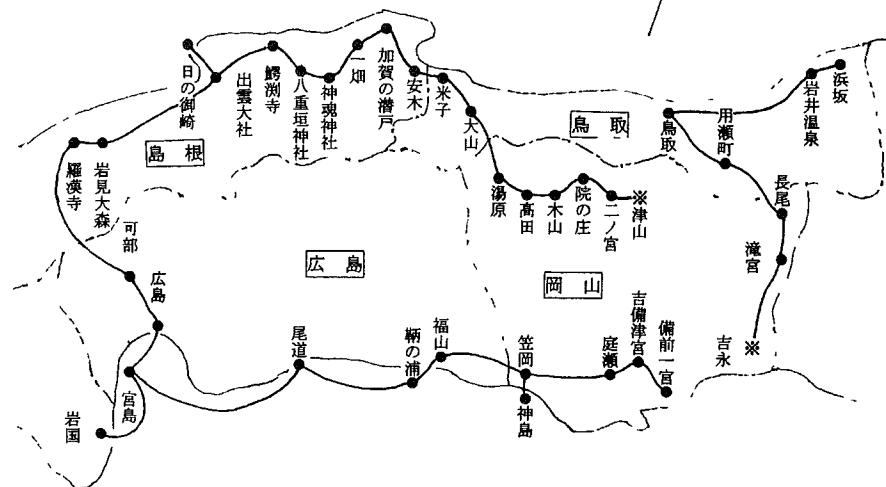
〒七一〇—〇〇二五

岡山県倉敷市倉敷ハイツ十二

TEL 〇八六—四二九—〇三三二

「出雲道の記」 旅程表

※出発点



武元はなと道の記について

宮口公子

武元はなは寛保四年（一七四四）岡山県英田町十町南村高坂六左衛門の長女として生を受けた。高坂家の遠祖は武田信玄の重臣高坂弾正であり、代々南村の庄屋を務めたという旧家であった。

父高坂六左衛門（了心）は近くの神社へ寒中の日参、七日間の通夜参籠をし薬師堂でも二十一日の参籠を行うなど、又村人にすすめて弘法大師ご縁日に「休ミ御馳走をゆるす」と村の女性ばかりを集めお地蔵様をまつる「女人講」をはじめたなど信仰心の厚い人であった。又了心は隠居をしてからは度々諸国巡礼をし、神社仏閣の参詣を行っている。後にはなが巡る出雲・伯耆へも父了心は巡礼の旅に出ている。

はなは宝暦十年（一七六〇）、十七歳で実家から六・五キロ離れた和気郡北方村（現在吉永町）の代々庄屋を務めた名家武元正孟の息子和七郎正勝の妻に迎えられた。嫁して七年目に長男正質（登々庵）、その三年後に次男正恒（君立）を生み、さらに二年後に三男半蔵を生んだ。はなは二人の息子が四・五歳になる頃、子供達の為に自ら小倉百人

一首を書いて与えた由「其手跡美事にして婦人の筆とも思われぬばかりといふ」と和気郡誌に書かれている。夫和七郎と共に子供達の教育には非常に熱心であり、二人の息子を近くの岡山藩校閑谷学校へ入学させた。安永七年（一七七八）、二月学校奉行が閑谷学校へ来られた時、先生の推挙で正質（十二歳）、正恒（九歳）の二人は後園（後の後楽園）へ召し出され、藩主治政公の御前で「小学」の一節を講じたという。この事から武元二兄弟の名は藩中に神童として名高く広く知られていた。又天明二年（一七八二）正月には正質（十六歳）、正恒（十三歳）の若さで北方村青年有志によつて結成された学習組織「天神講」の講釈人に押されている。この優秀な息子達は、はな夫妻にとつてどんなにか誇らしくあつたことであろう。他からも羨しがられるこの幸せはいつまでも続かなかつた。安永九年（一七八〇）、三男半蔵を八歳という可愛い盛りに亡くしたのである。はな三十六歳、その悲痛は察するに余りある。この三年後天明三年（一七八三）、はなは西国巡礼に立つ。一家の主婦という立場、三十九歳という若さでの巡礼については幼くして亡くした子の菩提を弔いたいとの願いからと察するが、夫和七郎の並々ならぬ愛情と理解があればこそ、と思われる。この巡礼のことは「西国巡礼の記」として残されている。「おろかなる筆をとりて発句を

書つけ侍る」とはなが書いているように俳句による紀行文であり（狂歌四首あり）名所旧跡風景を詠んだ句がほとんどであるが

着更るやしらぬ親子の初給

谷汲みや くんて菩提の種をまく

の句にはなの心を垣間見る思いである。

和七郎はな夫妻は二人の息子の教育には殊の外熱心で、まず兄弟読書の場として自宅の南隣に清風楼を増築し、天明四年（一七八四）には和気郡を訪れた肥前の儒者長尾蘭州を自宅へ請して教を受けさせ、次いで奥州の儒者志村東州（仲敬）を招き教を受けさせるなど、息子達の教育のために全力を注いでいる。

天明五年（一七八五）正質は京都に上り儒者柴野栗山（しものりざん）の塾に学び、寛政五年（一七九三）には正恒がその頃一般庶民にも解放された江戸昌平坂学問所に入り全国から集まった俊才と共に勉学を続けることになった。このように和七郎はな夫妻は息子達の為に当時最高の教育を受けさせたのである。その為に「家産も傾くほどであつた」といわれている。このように夫妻自慢の優れた息子達であつたが、正質は京都に上つて一ヶ月余りで病を得て帰国、又弟の正恒は憧れの昌平黉に入学したものの封建的門閥主義に浸潤されていた昌平黉に不満を持ち寛政六年（一七九四）

に帰国する。自慢の息子が二人ともに 志半ばで帰国したのを迎えたはなの心情はいかばかりであつたろう。

出雲路巡礼に出たのはこの頃であつたか、道の記に日付けが入っていないので確証はないが、文中に「おもへばたゞこの世の旅も末ちかく冥土の門出もをちこちはからねばと」書かれているので恐らく五十歳過ぎた頃のことであろう。

弟の帰国に代るよう寛政七年（一七九五）、兄正質は大坂へ旅立っていった。かねて播州安積氏について習得した眼の治療に生活の資を求めながら書道の研究に専念するのである。自分の好きな事をしていれば身体が調子が良いという理由であつたというが、病身の子を遠くへ出す母はなの心配は殊の外であつたようで、寛政十一年（一七九九）夏大坂の正質の宿を訪ねた折のはなの歌

老ひぬればこの世もうとくなるまゝに尚も別れはかな
しかりける

わするなよ泣いて別れし親と子の涙の川のはやきなが
れを

朝霧のわたる難波のうらめしやかへり見すれど みえ
ぬかなしさ

をよむ時その母心に胸つまる思いがする。

はながいつ頃から和歌をよみはじめたかについては、は

なの死後子供達が出した追悼の記「柩の紅葉」に正恒が寛政十一年（一七九九）「夏京師より前波黙軒^⑩とて歌の道に名ある人：中略：来り給ひしころ母なる人に歌よめと勧めたまひしより初めて此道に志を寄せ侍りき」と書いていることから極く晩年に歌をはじめ、亡くなる前僅か一年ばかりのあいだに百首ばかりも詠み、折々上京して黙軒の教えを受けていたことがわかる。

次男の正恒は江戸より帰国後は、多病な兄に代つて両親に孝養を尽し父の名主職を助けた。

長男正質は寛政十二年（一八〇〇）四月、江戸へ、さらに奥州へ旅立つ。健康状態も良好で「かかる有様を母にみせ奉りなばいかばかり悦び給ふらん」と自ら記すほどであった。しかし正質が八月廿日に江戸へ帰ると母からの文がとどいていて、病である事を告げ「今年はわきて心細く世をはかなくせんも計り難し」と哀れな文であった。正質は急ぎ帰国するがすでに廿日も前にはなは亡くなっていた。寛政十二年（一八〇〇）九月十二日晩のころ、五十六歳であった。しかし実際には、はなは九月九日までには元気で「九日の夜は燈火をかがげ、あくるまで詠草を書き給ひける」と正恒が書いている。はなは十日に発病しわずか二日の臥床での急死であった。後に正質（登々庵）が母を偲んで書いた亡き母にわびるという文章の中に「文のおもては

いつわりにて我帰る日を促す為になんありしが」と書いているが、すでに我が命のない事を悟っていたのか、ただただ息子に逢いたさの故であったのか、最後に息子に宛て出した文の「わきて心細く云々」の文字に胸が痛むのである。生あるうちには必ずしもはなの望んだような息子達の姿ではなかったが、母の死後息子達の生き方にはさすがにはな夫妻の教育の成果を見るのである。

長男正質（登々庵）は蘭学を学んだ後漢詩と書法の研究に専念し「古詩韻範」五巻「行庵詩草」六巻を著し、又菅茶山・頼山陽・浦上春琴・江馬細香ら当代一流の文人と交り、書家として書の社中を設立門弟を育てた^⑪。彼の遺墨は各地の寺院旧家に所蔵され、吉永町立美術館にも展示されている。

次男正恒（君立）は名主として家を継ぐかたはら農業の体験と若い頃から学んだ学問によつて封建農政を批判した「足食論」「耕漁論」を著した。又藩財政の困窮、農村疲弊の原因と現状打開の方法を論じた「勸農策」を書き藩主池田斉政に奉った。文化十年（一八一三）、母校閑谷学校教授に起用され、文化十四年（一八一七）には世子斉輝の侍講と藩校国学の授読師に任ぜられた^⑫。この事をはなが知つたらどんなにか嬉しく誇らしく思ったことであろう。しかし期待を寄せていた斉輝が若死にすることで落胆した

正恒は脱藩し、京都へ移り私塾を営み子弟の教育に当たった。彼の名著「勸農策」は備前藩では残念ながら用いられなかったが、後年備前中山藩の山田方谷は、この教えによつて松山藩を再生させ、又この書はそのまゝ二宮尊徳によつて実践されたという^⑬。又彼は歴史書「史鑑」をも書いたが、この書の指し示した王政復古の考え方は明治維新を実現させた薩長討幕派によつて実現されたという。正恒の生きた時代には受け入れられなかったが、まことに時代を半世紀先取りした天才正恒であった。

はなの生涯を考える時、何よりも素晴らしいと思うのは夫との関係である。若いころから俳諧・狂歌をよくした夫和七郎は、十七歳で嫁いで来たはなに優しく手ほどきをしたのである。二十九歳で書いた「西国道の記」も後の「出雲道の記」も俳句と狂歌でつづられている。さらに、はなが亡くなった後、夫和七郎が二人の息子の妻達に宛てて書いた「書き残し置く一札」という教書があるが、この中で「口に説くほどは身の行は出来ぬものに候。終に世間学者と相成り候由。此事勇次（正恒）母常々教訓いたすを閑居申候」と妻の意見として記している。封建色の強い時代の農村の大庄屋に嫁しながら、夫婦仲睦じく互いに尊敬し合う夫婦の姿を思い、はなの幸せな生涯をうれしく思う。はなと夫の墓は吉永町東山の武元家、明石家代々の墓地



武元はなと夫和七郎の墓

に寄りそうように建てられている。学者正恒が言葉を撰し、書家正質が美しい書体で碑文を書いたさゝやかではあるが心のこもった墓石である。

夫和七郎の墓には辞世として狂歌

きゆるともなお後の世に雪丸と塚のしるしのこすざれ歌

魂はあすへ飛ぶかも枯尾花
はなの墓には

草むらに結ぶとばかり思ひしをつひに消えゆく玉ゆらの露

と刻まれている。春浅き頃はなの実家の跡を訪うと、節分草が雪が散ったように咲いていた。教養深く人情豊かな良妻賢母であったはなの姿を思わせる清らかで凛とした早春の花であった。

〔註〕

- (1) 高坂家御出身の岡山県英田町安東祐輔・圭子夫妻の御教示による。
- (2) 『英田町史』（平成八年）「村の教育と学問」による。
- (3) 『和気郡誌』。
- (4) 寛文八年（一六六八）岡山藩主池田光政が和気郡木谷村延原に、庶民の子の子弟の教育を目的に設けた手習所を素として設立された岡山藩の郷校。学風は創立以来朱子学派であり、校内に孔子を祀る孔子廟がある。大規模な施設の大半が現在までよく保存され国指定特別史跡となっており、講堂は国宝その他の建物のほとんどは重要文化財である。『岡山県大百科事典』『関谷学校』（岡山文庫）による。

(10) 延享四年（一七四七）→文政元年（一八一八）京都の歌人 大和高取藩臣中谷氏 長じて但馬豊岡国老前波氏の嗣となる。四十歳で京都に出、小沢蘆庵に和歌を学び後一家をなして世に称せられる。人となり純誠寡黙にして吟詠風月を楽しむという。登々庵（正質）は晩年京都に住居し 黙軒と深く交ったという。日笠研太氏による。

(11) (12) 『岡山県大百科辞典』柴田一氏による。

(13) 『教育時報』（岡山県教育委員会）二〇〇〇年三月号 岡山人物再発見⑩「武本君立」仙田実氏（元吉永町史編集委員長）による。

おわりに武元はなの研究については柴田一先生、仙田実先生、岡山県総合文化センター竹林栄一先生に資料の御提供と御指導をいただき、武元家後裔の吉永町明石家御一族高坂家ゆかりの英田町安東御夫妻に多大のお世話にあずかりました。古文書解説については、倉敷古文書の会ご指導の高田稔先生にお教えをいただきました。ありがたく厚く感謝を申し上げます。

〒七一〇一〇〇二五

岡山県倉敷市倉敷ハイツ十一一

TEL・FAX 〇八六一四二九一―一三八九

(5) 岡山市にある庭園。貞享三年（一六八六）岡山藩主

池田綱政の創案で家臣津田永忠が設計、施工を総括十四年の歳月をかけて元禄十三年（一七〇〇）に一応の形を完成した。面積十三万㎡におよぶ江戸初期を代表する大名庭園。『岡山県大百科事典』による。

(6) 武元家末裔の明石照男氏が、人を頼み書き写させたものが閑谷学校に納められている。就実女子大文学部長柴田一先生から、「出雲道の記」と共に コピーを頂戴した。

(7) 肥前の国（佐賀県）の儒者としかわかつていない。天明四年（一七八四）偶々和気郡大内村に立寄られたのを武元家が招き、息子達の為に教えを請うたが、間もなく病にかゝり同年四月武元家にて他界。はなは親身の看病をし、丁重な野辺の送りをした上に彼の十七回忌まで弔いを欠かさなかった。正恒はこの母をみて、「年々の忌日のとぶらひもさらにおこたり給はず われらしたしく御教えをうけながら年ふるにしたがいてわすれ侍るに母の心あつき事いたらぬくまなきを思ひて ありがたくぞ覚え侍る」と感服している。『吉永町史』による。

(8) 元文元年（一七三六）→文化四年（一八〇七）寛政の三博士の一人といわれた幕府の儒官（朱子学派）。

(9) 日笠研太氏著 地方史資料『遺誠と和歌』による。

B5判四〇九頁 発行所桂文庫（〒〇三―一五五―一五三）

定価三、八〇〇円

後藤逸女 藻塩草

― 史料と背景 ―

主な内容

- 一、史料
 - 歌集
 - 随筆
 - 手紙
 - その他
- 二、逸女について
 - の考察
 - 生い立ち
 - 歌の道
 - 逸女の生きた時代
- 三、逸女史料の背景
 - 後藤逸女の研究家として名ある高橋傳一郎氏が年月をかけて膨大な資料を収集、解説、翻刻、注解したもの。
 - 逸女は秋田県旧川連村（現稲川町）の農家に生まれ、十代半ばに秋田藩士に才能を見出され、久保田城下で和歌や書を学んだのちに江戸藩邸に招かれ、当代の女流歌人たちと交流した。
 - 逸女の見事な筆蹟と解説は江戸期女性研究の必読書。

近世女性双書 第一巻 高橋傳一郎著